49. 当院における閉塞性黄疸の現状

鵜梶　実　(県立佐原)

当院内科では，最近3年間に63例の閉塞性黄疸を経験した。その内訳は良性疾患が30例，悪性疾患が33例であった。黄疸の程度からみると総ビリルビン値15.1mg/dl以上の高度黄疸群では81.8%が悪性疾患であった。良性疾患の93.3%が内科的治療により治癒し，手術対象となったのは1例のみであった。悪性疾患の手術不能例のうち9例に金属ステントを使用し，その中には長期有効例もみられた。

50. 無黄疸にて発見された治癒切除しえた下部胆管癌の1例

波多野良二，甲嶋洋平，小山秀彦
高橋　淳，仲野敏彦，野口武英
大野　孝則　(船橋中央・内科)
高橋　誠　(同・外科)
大久保春男　(同・病理)

無黄疸で発見され，治癒切除可能であった下部胆管癌の1例を経験した。症例は76歳女性で，発熱と腹痛を主訴に当院を受診した。血液検査で胆道系酵素の上昇を認めたが，腫瘍マーカーは正常であった。US，ERCP，PTC，造影CTにて下部胆管癌と診断し，膵頭十二指腸切除（R_2）を施行した。肉眼所見は結節浸潤型の胆管癌であり，組織診断は高分化型管状腺癌（se，hinf0，ginf0 panc1，d0，vs0，n(−)，hw0，dW0，eW0）であった。

51. 悪性胆道狭窄例のEMSによる内瘻化成績の検討

甲嶋　洋平，仲野敏彦，小山秀彦
高橋　淳，野口武英，伊藤文憲
大野　孝則　(船橋中央・内科)
大久保春男，近藤福雄（同・病理)

悪性胆道狭窄9例（胆管癌7例，肝内胆管癌1例，胃癌1例）にEMSを使用し検討した。前二者は外照射，後者は化学療法を併用した。EMSは小径より容易に留置でき，分枝の多い箇所にも使用できる。全例留置成功，うち8例で外瘻チューブが抜去できQOLが向上した。一方，肝門部胆管癌などの併用療法に効果の低いものは，肝外胆管癌や他の悪性腫瘍よりも再閉塞が生じやすい。今後，併用療法による腫瘍制御が問題と考えられた。

52. 膵嚢胞性疾患の2例

遠藤恒宏，加藤　敬，松川正明
栗原　稔
(昭和大附属・豊洲病院)

各種画像検査法の発達により膵嚢胞性疾患の存在診断は比較的容易になり，質的診断や治療方針についての検討が見直されている。

鑑別の上で最も重要なのは腫瘍性か，非腫瘍か，さらに腫瘍性では良性か，悪性かという点にある。

我々は，上腹部痛を主訴に来院し，慢性膵炎に膵嚢胞性疾患を合併した症例を経験したので，若干の文献的考察を加え報告する。

53. 膵癌と鑑別が困難であった慢性膵炎の1症例

長谷川茂，品川　孝，浜野有記
木村雅樹，飯野康夫，宇梶晴康
一戸　彰　(上都賀総合)

症例は79歳の男性で，肝機能異常の精査目的で来院。入院時検査ではGOT，GPT，AMYの軽度上昇，胆道系酵素の中等度上昇，Elastase-1の高値を認めた。腹部超音波にて膵頭部の低エコーmassとその尾側膵管のジュズ状拡張，および胆管の拡張をみた。ERCPでは膵頭部膵管の狭窄と尾側膵管の拡張が，門脈造影では門脈の狭窄所見がみられた。以上から膵癌を疑い手術を行ったが病理診断は慢性膵炎で悪性所見は認められなかった。

54. 膵腫瘍との鑑別が困難であったDesmoid腫瘍の1例

伊藤健治，崔　馨，崔　世浩
岩間章介，田口忠男，石原運雄
加藤繁夫　(千葉労災)
塚本　剛，鈴木　秀（同・外科)
今野暁男　(同・病理)

症例は26歳の女性。主訴は嘔吐。膵体尾部にcysticな部分とsolidな部分からなる腫瘍が見られ，各種腫瘍マーカーは陰性であった。術前の診断はsolid and cystic tumorであったが，病理の結果はDesmoid腫瘍であった。